

風になびく稲の穂

都城市立安久小学校 5年 肥後 和花

昨年度の終わりから、友だちと会えない日があったり、学校にいても、遠足やプールがなくなったりしました。今も、楽しみにしていた夏休みでしたが、どこにも行けず、家で過ごしています。今までの生活が、あつという間が変わってしまったて、つまらないです。

しかし、変わらないものもありました。それは、登下校中に見える景色です。私の住んでいる、安久町では、たくさん田んぼがあり、すくすくと育った稲の穂は、この時期、青々と風になびいています。大陽に照らされて、気持ちよさそうに、なびいています。そして、この景色を見ると、なぜか、私は、がんばろうと思えます。

「みなさんは、お米を残したり、捨てたりしていませんか。」
私も、ついつい残してしまったり、また、そのままにしすぎて、固くなり捨ててしまったりすることもあります。

今、お米は、お店に行ったら手に入るし、おにぎりやお弁当も、近くのコンビニに行ったら、すぐに手に入ります。そのような中で食べられるのも、どこか「あたりまえ」のことだと、思っている私がいいます。

そういえば、「昔は、とてもきちょうだったんだよ。」とおじいちゃんが言っていました。戦争が行われていた、小さい時は、お米は、兵隊さんにあげて、自分たちはイモや大根を食べていたそうです。平和になる

につれて、ごはんが食卓にならんでいったそうです。見ると確かに、おじいちゃんは、ごはんをのこしません。一粒も残さずに食べます。私にとってあたりまえでも、おじいちゃんから見るお米はあたりまえではないのだなと思いました。

それから、今、学校の社会で、お米の勉強をしています。その中で、田起こしや、代かき、田植えや稲刈りなど、お米をつくるためには、たくさんの工程があることが分かりました。また、草取りや水の調整など、天候をいつも気にしていなければいけません。私も、先日の大雨の時に、近くの田んぼを地域のおじさんが心配そうに見ている姿を目にしたことがありました。かさをもって、かたぐらいまでつかった稲を、見ている姿はとてもさみしそうでした。きっと、手をかけた分、足を運んだ分、心配なのだろうと思いました。

私にとって、あたりまえだったお米。しかし、今は、あたりまえではなくなりました。一粒、一粒に時間がかかっていることもわかりました。

生活が変わっても、風にゆられて生き生きと育っている稲の穂。その美しい姿の後ろには、農家の方のたくさんの苦労や時間がかかっています。これからは、この気持ちを感じながら、大切に食べたいと思います。